島木赤彦研究会編

赤彦とアララギの歴史

教育出版センター

研究叢書 4

島木赤彦研究会の事務局は，教育出版センター内にあります。

検印
省略

研究叢書 4　赤彦とアララギの歴史

昭和五十年八月二十日　印刷
昭和五十年九月十五日　発行　©

編著者　島木赤彦研究会
発行者　柴崎芳夫
印刷所　長塚印刷株式会社
　　栄泰印刷株式会社

発行所　株式会社　教育出版センター
〒170　東京都豊島区北大塚三―二九―二
電話（03）九一七―八九三〇（代）
振替　東京　一四六一二

乱丁・落丁本はいつでもお取替えいたします　3091―1604―1475

序

土屋文明

現在のアララギの源流としては、赤彦の比牟呂が大きな一流であったことは、初期アララギの覆刻が刊行された現在では、周知のこととなった。赤彦とアララギといふ研究論集が発刊されるのもうべなりと言ふべきであらう。

赤彦が今日のアララギ、殊にその経営面での基礎を築いたことは、疑ふ人もない事実であるが、初期の赤彦については、私などにも、十分にわかってゐないことが少くない。例へば高島小学校をやめた頃の心境などは、ただ想像を交へて、考へてゐるにすぎない。更に退職上京した頃のことなど、初めからアララギを引き受けるつもりがあったのか否か。赤彦は上京後間もなく八丈島に渡った。あの頃の八丈島は鳥も通はぬ程ではなくても、現在の人の考へる所とは、大きく違ってゐた筈だ。そして、長い間帰らないので、周囲の人、と言ってもアララギの人たちであるが、その人々を心配させた程であった。ずっと後年になってであるが、赤彦は、上京した時は、自分の遅れてゐることをつくづく身にしみて感

じたと述懐した。これは、赤彦の本音であったらう。赤彦が文学的進歩を目ざして、いろいろ苦心してゐたことは疑ふまでもない。

近来の文学研究は微に入り細に亘るのが特色であるから、此の度の論集も丹念に読んでゆけば、吾々の知りたい多くのことごとが究明されるものと、期待をかける次第だ。

昭和五十年七月二十五日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

序　土屋文明

第一章　赤彦とアララギの歴史—大正短歌の成立—

「諏訪文学」「比牟呂」「馬酔木」「アカネ」時代の赤彦……伊東一夫　2

初期アララギ時代……北沢敏郎　35

『切火』『氷魚』時代……山根　巴　53

『太虚集』『柿蔭集』時代—晩年の赤彦—……本林勝夫　85

第二章　赤彦と同門歌人

伊藤左千夫……田中順二　104

長塚節……大戸三千枝　119

中村憲吉……扇畑忠雄　134

斎藤茂吉……神戸利郎　144

古泉千樫……藤田福夫　162

平福百穂・岡麓……新井　章　176

土屋文明……阿部正路　196

第三章　赤彦門下とその周辺

土田耕平―耕平の赤彦観―……保科賢朗　216
森山汀川……矢崎孟伯　230
篠原志都児……伊東一夫　241
今井邦子―赤彦とのかかわりを主として―……山根　巴　253
中原閑古・久保田不二子・若山喜志子……神戸利郎　267
太田水穂―島崎藤村を核にして―……小林一郎　282
堀内卓造296・胡桃沢勘内308・望月光男320……山田良春　296
〈赤彦蔵書目録〉……久保田健次　矢崎孟伯　337
〈赤彦を中心とするアララギ略年譜〉……神田重幸　338
あとがき

第一章　赤彦とアララギの歴史

――大正短歌の成立――

「諏訪文学」「比牟呂」「馬酔木」「アカネ」時代の赤彦

伊東一夫

一

正岡子規の没後、根岸短歌会の機関誌として明治三十六年、伊藤左千夫によって刊行されたのが「馬酔木」で、四十一年までに三十二冊発行、根岸派の基盤を据えた。「馬酔木」を継承した三井甲之の編になる「アカネ」は、四十二年の終刊までに十七冊を発行、根岸短歌会の発展に力を尽した。しかし、左千夫と甲之の間に生じた不和は、根岸派の分裂を来たし、「馬酔木」に参加した千葉在住の蕨真によって、四十一年十月に「阿羅々木」の創刊をみるに至った。翌年九月、発行所が東京の左千夫宅に移され、「アララギ」と改称、「アカネ」廃刊後は、この「アララギ」が、根岸派の正統として、今日にまで継承されてきた。

明治四十二年、左千夫と赤彦の合意において「アララギ」への合流を行ない、発展的な解消を遂げた時、「比牟呂」は漸く中央に短歌誌としてその存在を明らかにした。しかし、「馬酔木」の活動開始前に、根岸派の革新的文学活動

を継承する俳句と短歌運動は、山深い信濃高原の湖のほとり諏訪の地に、その根を健やかにおろしていたのである。根岸派の俳句運動を継承した岩本木外や関紫竹らを中心とする雑誌「諏訪文学」を起点として生まれた「比牟呂」は、岩本木外と赤彦の編集によるものである。「比牟呂」が生誕したのは、実に「馬酔木」創刊の五ヵ月前、即ち三十六年一月であった。そして、「比牟呂」の最大の後援者として、批評や作品発表を続けたのは、伊藤左千夫であり、「比牟呂」の後期には、長塚節や蕨真も協力の手をさしのべていた。その限りにおいて「馬酔木」と「比牟呂」とは、完全な姉妹誌ともいうべき存在であるのみならず、この二誌は、ともに「アララギ」の源流であり、礎石となるべき重要な役割をになっていたのである。

子規による俳句革新運動に共鳴し、子規に会い、虚子や碧梧桐らとの交わりをもちながら、長野県の諏訪の地で、いちはやく新派俳句運動を始めたのは、赤彦と同郷の俳人岩本木外と関紫竹であった。そのさかんな気慨と豊かな個性と、たくましい実践力に加えて識見の高さにおいて、木外は、地方文学者のなかで抜群の存在であった。赤彦は〈諏訪の俳句を開拓して新らしき生命を与へたる者に木外あり、河柳あり、紫竹あり、栗堂あり。（略）木外は進んで拓くを長とし、河柳は守つて固うするを長とせり。（略）諏訪の俳句は河柳よりも寧ろ木外を繞つて動けり〉（日曜一信）と、木外を評している。木外（本名は永正）は、明治五年十月二十五日、長野県諏訪郡下諏訪町高木に生れ、二十年、高島小学校卒業後、下諏訪小学校教員となり、四十三年に没するまで、長野県各地の小学校を歴任した。二十八年頃から俳句に志し、関紫竹とともに正岡子規に学び、新派俳句の研究に努め、三十一年二葉会を設立して積極的に俳句活動に志した。三十三年四月、諏訪郡玉川小学校に転じた時、同年五月、同校に池田尋常高等小学校から転勤してきた赤彦との交友が開かれたのである。「諏訪文学」「比牟呂」の発行のほかに、「南信評論」「諏訪新聞」などに執筆、また句集『諏訪新俳句』を編集して、三十五年四月に刊行、明治四十三年八月十八日逝去した。（『木外遺稿』による）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

関紫竹（本名は一郎）は、明治三年九月六日、木外と同じく下諏訪町高木に生れた。木外の従弟で、父は医師である。二十二年、済生学舎を卒業してから医師として勤務、二十九年東大医学部の眼科教室で実修の後、三十年に上諏訪で眼科医を開業した。二十八年には、木外と、子規の門に入り、「日本新聞」の俳壇に投句をはじめた。三十一年、木外とともに二葉会を起し、三十五年の『諏訪新俳句』の刊行では、その選句を担当、四十三年の木外の死を痛嘆し、『木外遺稿』の発行者となった。大正十三年、「南信日日新聞」の俳句選者となる頃から二葉俳壇は再興をみるに至り、大正十五年には、畏友である赤彦の死を悼み、追悼句会を催したこともあった。昭和十年六月二十六日逝去した。（『関紫竹句集』による）

俳句への熱意と俳壇革新の意欲に燃えている木外・紫竹らは、明治三十一年に二葉会を結成してから、当然俳句運動の基盤をなす機関誌の必要を痛感したにちがいない。かくして「諏訪文学」は生み出されることとなった。第一号は明治三十二年十二月五日、諏訪文学会の刊行、編集兼発行者は村田勘三郎である。会則には、〈本会ハ本郡文学ノ改進ヲ図リ道徳ヲ進ムルヲ以テ目的トス（二号からは「本郡文学ノ改進ヲ図ルヲ以テ目的トス」と改められた。）〉とあり、発刊の辞は、〈死して而も死せざらんと欲せば、警世の一大文字を遺さざるべからず、嗚呼警世の文字、警世の文字、思ひ一たび玆に至らば、何ぞ退いて硯池を深うし、筆鋒を磨き、他日雄飛の素を養はざる、坐せ年少気鋭の士、吾が「諏訪文学」は、卿等の素養所たり〉というように、文学を愛する若い人々に力強く訴えている。道徳的向上の意図が濃厚であったためか、二号から会則が改められている。作品は漢詩・短歌・俳句・新体詩・評論であるが、やはり俳句がその中心をなしていたことは明らかであり、次の二号の木外の記事は、このことを立証するものである。

三十三年二月に二号が発行されたが、木外は「二葉会の事」として、次のように述べている。

諏訪各地各会の新派俳人が団結して二葉会となつた。二葉会と云ふものは明治三十一年の夏紫竹と余と起した。三十年の秋から紫竹と新派の研究を始め一ヶ年ばかり経過してこの会を始めた。虚子から両君率先して御地俳壇

御開拓被下度（略）と言つて来た。斯の如く二葉会は本郡俳諧革新の重任を負ふて生れた。（略）夫れ二葉会の主張と生命とは実に本郡俳諧革新にあるのだ。（略）本会の成立は我諏訪俳諧史上に特筆大書すべき要件たるを忘るな。（略）本郡の俳諧的位置をして日本の俳壇上に立たしめんことを思ふて止まない。

なお「二葉会員に告ぐ」としてその綱領に、〈一、諏訪郡各部の新派俳人を以て組織す　一、機関として諏訪文学を用ふ〉とあることによって、木外と紫竹を軸とする二葉会の会員とその作品が、「諏訪文学」の基盤をなしていたことを知り得る。二号以後から和歌の選者は岩本尚賢、俳句選者は、紫竹と木外、他に河西河柳がこれにあたった。河柳は編集者の一人であった。そして、ここで注意すべきことは、後にアララギ派の有力歌人となる森山汀川が、俳句作者として、また木外の親友として彼を側面から支援し、一号には「秋夜読書の記」を寄せており、二葉会の幹事役をつとめ、その句作品は、毎号「諏訪文学」誌上を飾っており、作者としても重い位置を占めていたことである。

二

「諏訪文学」第七号は、明治三十三年十一月に発行された。島木赤彦が登場することにおいて、この号はきわめて注目すべきである。当時の赤彦は、「二水」「山百合」の号を用いていた。この七号に、山百合の新体詩「別離の歌」が突如として現れたのみでなく、予告として九号からは和歌の選者は、岩本尚賢のほかに久保田二水があたると報ぜられていることである。「諏訪文学」において、赤彦はすでに短歌の指導者的地位を与えられていたとみることができる。

これまでの赤彦は、「青年文庫」「文庫」「日本新聞」「国風」などへの投書によって、新体詩や短歌の発表を行なっていた。明治三十三年には、もっぱら「諏訪青年」と「諏訪文学」が、彼の活躍舞台であった。すでに相当の歌歴はあ

ったが、彼独自の歌風を確立するまでには至らなかった。正岡子規が、新聞「日本」で、新短歌を募集、その選歌の発表を始めたのは、明治三十三年一月からであった。信州でこれに応募した人々は、山百合・手塚縫蔵・矢野一二・奥村政治郎・北原痴山・細川寛一・桃沢重治・窪田空穂らで、彼等は子規の短歌革新に共鳴、子規を敬仰して作歌の選を受けた信州の先人達であった。明治三十三年二月、「日本新聞」に発表されたのが、赤彦の〈藍毘尼の林の中に光満ちてあもりたまひし釈迦牟尼ほとけ〉であった。したがって、諏訪文学時代の赤彦は漸く短歌革新運動における子規の存在に注目し、自己の作品の方向をそこに見出してゆく過渡期にあたっていた。木外らの二葉会は、むしろ直接に根岸派のありかたを赤彦に伝えるうえに役だったにちがいない。

このように赤彦が「諏訪文学」と交渉をもつに至った事情は、木外と赤彦が同一校に教鞭をとるという幸運なめぐりあわせによるものであった。即ち木外は三十三年四月、赤彦は五月に、諏訪郡玉川小学校に転勤してきたことによっている。おそらく木外の熱心な勧誘と、彼の文学運動に対する深い共鳴が、赤彦を参加させたことと思われる。そしてまた、木外の炯眼は、二十四歳の青年赤彦の非凡な才藻を見抜いていたが故に、歌壇の選者を委ねたにちがいない。

第八号は三十三年十二月の刊行であるが、赤彦は、「和歌漫語」(評論)、「衣掛柳」(新体詩)、「開橋十首のうちに」(短歌)を掲げた。この頃、木外は、純俳句誌「青ほほづき」の発行を企図し実行に移していたが、結局三十五年四月二十七日、三光堂書店の句集『諏訪新俳句』に実現した模様である。本書は、鳴雪の巻頭句に虚子の序を掲げ、当時の諏訪地方における新興俳句の総結集ともみなされる重要な作品集で、赤彦の俳句作品の大部分もこれに収録されている。

赤彦の「開橋十首のうちに」の作品

にひばしやときはなるべきかたつ岸苔むす岩を橋杙にせり

にひ橋の黒ぬり橋のみしめなは注連きりはなち人渡らせぬ
さみだれに水嵩ますともいかつ橋流の上にときはとぞおもふ
沈む日の雲にかがよひ雲影の波にうつろひまばゆき湖

などについて、森山汀川は〈之を見ると「手植ゑの千くさ」時代の調子と、当時の日本派風との交錯した姿が、幾分情想の上にも格調の上にもうかがはれるのであるが、一読面目新たなるものあつて、大道はもう拓かれてゐる〉と評している。「手植ゑの千くさ」とは、赤彦が学生時代に草した自筆歌集で、新体詩も録してあり、このころの彼の短歌は桂園調の習作である。

第九号（三十四年一月刊）では、赤彦の活動はめざましいものがあり、「和歌漫語」（評論）、「道ゆきぶり」（新体詩）、「投寄和歌」十一首、それに募集和歌の選をこの号から行なっている。第十号（三十四年三月刊）には「投寄和歌」として二首、募集和歌の選を行ない、自作三首を添えている。それに木外を中心とする句会では四句を詠み〈寒林を通りぬけたる冬田哉〉などが発表されている。句作にも赤彦の熱意がうかがわれるが、本号から募集俳句の選者を虚子が担当したことも注目される。第十一号（三十四年七月刊）では、「投寄和歌」七首、募集和歌の選に自作一首を添えているが、二葉会の句会で詠んだ二句が発表されており、この頃の赤彦の活動が、新体詩と短歌、附属的ではあるが、俳句の三方面に向けられており、鋭鋒はみとめられるが、まだ短歌の道に自己を確立するに至らぬ過渡的な様相を示していた。三十八年に刊行された太田水穂との共著『山上湖上』は、赤彦の新体詩集として注目される。彼が短歌の世界に自己の進路を見出し、歌人としての自己を育成してゆくうえに、木外との友交と「諏訪文学」の動向は、微妙な交渉をもっていたのであるが、この十一号は、ついに「諏訪文学」の果断な改革を宣言した。

本会が去る明治三十二年十二月を以て呱々の声を挙げしより凡そ二十ヶ月なり。（略）然も本会が此間に処し苦楚辛酸聊か筆を禿して其声を大にしたるもの仮令最初の抱負を充たすこと無しと雖和歌や夫れ俳句に於て亦明に

貢献したるもの尠しとなさず。今や歩武整々直に雑誌十二号を発して茲に目出度完結を告げんとす。（略）即ち吾人は茲により多く規模を拡めより多く計画を大にし更に諏訪の天地以外に呼号せんとす。即ち「氷室」発行の挙ある所以是れ実に吾人が希望にして亦本会最初の精神なりとす。「氷室」に就ては要項略ぼ左の如し。（一部省略）

一、「氷室」は諏訪文学を改題せるものなり。
一、「氷室」発行と共に諏訪文学会を解散す。
一、「氷室」は諏訪的範囲に蹋蹐せず日本的なり。

三

「諏訪文学」が発展的解消を遂げて、地方誌的存在から全国誌的存在へ、地方文壇から日本の文壇に立とうとする、大いなる抱負と決意が示されている。いいかえれば、彼らは、新文学誌としての「氷室」の創刊を宣言したのである。「諏訪文学」を支えてきた二葉会の動向は、このような改革に対していかに対処したであろうか。「諏訪文学」十一、二号で、木外は、二葉会のありかたについて、会員に次のように訴えている。

「氷室」発刊に就て諏訪文学会なるものは解散する訳なれど二葉会は何等の影響もないので爰に諸君に改めて希望するのは「氷むろ」の充分なる成長を遂げるやうあらゆる方面より尽力されたいといふ事である。「氷むろ」が大規模を以て日本の文壇に立つといふことは思ふに仲〳〵の難事で吾人は精励一番他日の成功を期してこの事に従ふ決心である。（十一号）諏訪文学会が解散しても二葉会は残つて居る。これは勿論の事で二葉会は尚ほいよ〳〵拡張の主義を取つて進むのだ。徒らに人数の多いは望まないので本会も現に四十四人の会員を有して居る

が中には殆んど有名無実になつて居る人が見へる。若し気に喰はないならずん〳〵退会するがよし左もなくば宜しく本会の主義と綱領とによつて同一歩調を取るべき筈である。（十二号「二葉会の事」）

「諏訪文学」の発展的解消において、二葉会の一層の充実と向上を期して、会員の奮起を促がしており、当時の会員が五十名近いことを記している。しかるに、「諏訪文学」は第十二号（明治三十四年十一月刊）で、木外による予想外の告知を掲げた。

雑誌諏訪文学は雑誌諏訪青年と合し「革新」と改題して発行す。さきに栗堂、月渚、汀川の三子と謀り、雑誌「氷室」を出さんとし、偶々会員に告げ、已に百金に近き寄附を承諾されたり。この金少しとは言へ、優に「氷室」を計画するに足り、尚ほ「氷室」が諏訪以外に行はるるに至れば、将来益々見込あるに至るや必せり。（略）然も予は今の境遇、多事多紛、如何に探すと雖遂にこの閑を見出す能はざるなり。遺憾痛恨。耻しながら「氷室」発行は暫く延期す（略）異日一旦機を得、また天下に目えんか。また、眷顧を垂れよ。（敢て言ふ）

「諏訪文学」は「諏訪青年」と合併して「革新」に生れ変ることとなり、「氷室」の発行は延期されるという急激な事態が四か月の間に生じたのである。この木外の告知によれば、「氷室」創刊について、栗堂・月渚・汀川の三人と相談したとあり、赤彦や紫竹にふれていない。ここにあげた三人は二葉会の俳人であり、「諏訪文学」の創刊から木外をたすけてきた人々であるから、彼らに下相談を試みたことは当然であるとしても、実質的に「諏訪文学」を支えてきた赤彦や紫竹が、どのような姿勢を示したかは明らかでない。しかし、「氷室」の計画における木外と赤彦の間に意見の衝突があったような事実も、全くみとめることはできない。「諏訪文学」を吸収して生れた「革新」（三十五年一、三月号）には、赤彦の歌評や短歌が掲載されているからである。「氷室」刊行の資金もすでに用意されていたが、ただ木外が明白に伝えていることは、身辺多事多端で、編集に全力を傾けることができないという理由である。明治三十四年の木外の生活は、旅行（県下の各地から富士の裾野めぐりなど）にその多くを費やしたようであるが、しか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com